

手のなるほうへ

くらやみの中でボクは目をさました。

あたりいちめんまっくらだ。
本当になにも見えやしない。

手をのばしてみても なにもない。

足をのばしてみても なにもない。

さて、どうしよう。

このまっくらやみの中を あるいたら
なにかにつまづいて ころんでしまうかもしれないし、
おとしあなに おっこちちゃうかもしれない。

ぼんやりそこにいると、
どこからともなく 手をたたくおとが きこえた。

ボクはよおく耳をすませて おとのするほうを見た。

「おおーい、きみはだれだい？」

よびかけると 手びょうしはとまったけれど
へんじはない。

「ボクのなまえは だよ。きみのなまえは？」

やっぱりへんじがない。

しばらくすると また 手をたたくおとがきこえた。

ボクはおなじくらい しばらく かんがえたあと、
足をふみだした。

手のなるほうへ。

手のなるほうへ 手のなるほうへ。
オニさんこちら。

ボクはオニじゃないんだけどな。

でも、ボクはわくわくしていた。
だってもう くらやみの中でひとり つっ立っているのにあきたんだ。

手のなるほうへ 手のなるほうへ。

ずんずんずん。

ボクはげんきよくあるく。

だけど…

としん。

いたたたた…

ボクはなにかに つまづいて ころんじゃった。
手のひらと ひざこぞうが ヒリヒリする。
すりむいたのかな？ 血がでたかな？

ボクはちょっとなきそうになった。

ふと気がつくと 手のおとがしない。
ボクはあたりをキョロキョロ見まわした。
いくら耳をすませても やっぱりおとがしない。

ボクはちょっとふあんになった。
きみはボクをおいていったんだろか。
なき虫でよわ虫なボクを見て きらいになったんだろか。

ボクはのろのろと立ち上がった。

すると…

ふたたび 手をたたくおとがした。
ボクはびっくりして 目がまるくなる。

もしかして…
もしかしてきみは、
ボクが立ち上がるのを まっていてくれたの？

ボクはまた あるきだした。

手のなるほうへ。

きみはボクを まっていてくれたの？

どうして なにも はなしてくれないの？

きみはボクを どこへ つれていってくれるの？

きみはやさしい人？

それともほんとうはボクをだまそうとしている？

それでもいいんだ。

きみはくらやみの中で つっ立っていた
ボクをうごかしてくれた。

ボクはきみの手をしんじようとおもう。

手のなるほうへ 手のなるほうへ。

いったい どれくらいあるいただろう。
ボクは やすみなく あるきつづけた。

そして…

あ！

ひかりだ！

ボクはおもわず かけだした。

ひかりはどんどん大きくなって、
ボクはひかりのつよさに 目をほそくした。

目をこらすと ひかりの中心に 大きなとびらがあった。

ゴールだ！

とびらのとってに手をかけて ボクはふりかえった。

ながい ながい たびをしたみたいだ。

もうきみが手をたたく おとはしない。

「ボクのなまえは だよ。
きみのなまえは？」

やっぱり、へんじがない。

「ねえ、
ボクのなまえ おぼえておいてね。
ぼくは むこうへ行くよ。
ここまでつれてきてくれて ありがとう。」

「またね。」

Fin.

「手のなるほうへ」

作 川村 魚実（かわむら ななみ）

二〇〇二年八月十五日発行